

# 論語教室だより

『寺子屋・こども論語塾』世話人会

第 58 号

2015 (平成27) 年12月19日 (土)

## 啐 啄 の 機

寺子屋・こども論語塾 主宰 新田 修

禅宗で機を得て両者相応ずることを「啐啄」と言います。

啐啄の「啐」は、鶏の卵がかえるとき、殻の中で雛がつつく音で、「啄」は、母鶏が殻を噛み破ることを意味します。

卵の中のひな鳥が目覚めて、殻を内側から打ち破ろうとつづく時、親鳥はそれに応えて、機を逸せず(よ)いタイミングを逃さずに)外側からつつき、ひな鳥を新しい世界へ送り出します。

親鳥は決して自分からついて、ひな鳥を出すことはしません。たとえ、出て来ていい時期になっていたとしても、ひな鳥が自分から出ようと決意して行動を起こすまでは、じっと待つのです。ひな鳥が、「つつく」という行動を起こした時に親鳥は初めて援助します。ひな鳥の動きに親鳥が相応じて、得難いチャンスをしっかりつかんでこの世に誕生させていく、鳥たちの様子から出てきた言葉です。

塾生の皆さんはどうでしょう。毎日の授業や家庭学習を「啐啄の機」と捉えて努力しているのでしょうか。やってくるように言われた宿題だけは何とかこなして、後はただ机の前に座っている。そんな人はいないでしょうか。今日の授業内容をしっかり理解したい。わかって帰りたい。そのためには、どんな下準備をしていけばよいのか。そのような心構えと準備ができて初めて「啐啄の機」となるのです。

親鳥は知っています。自分で自分の殻を破って外へ出てみようと思わないひな鳥を無理やり出したところで、生きのびる力のないことを。

人は何のために勉強するのでしょうか。そうです。「君子」になるためです。

塾生の皆さんは、そのための目標だけはしっかりつかんで見失わないように努力を続けてほしいと思うのです。努力に無駄はないのです。努力とは目標を愛することなのでありますから。

今年も残すところ後わずかになりました。この冬休みを利用して、希薄(乏しいこと)になりつつある親子の対話が一層深まることを切に希望します。どうぞよいお年を！

### ◆「PHP」の12月号より

「魂の筆跡」欄に書家の金沢翔子さんの「怒」という席上揮毫(大衆の前で毛筆で言葉を書くこと)した時の字が載っていました。以下、母親の泰子さんが書かれた文章を掲載します。

ある日、「お母さんが怒るとき、私が『怒!』と言ったらニコツとしてね」と申し出てきた。私は承諾した。親子だから叱ることは多かった。平和でなければ困ってしまう翔子は、その度に悲しかったのでしょう。「怒!」と言われたら私はどんなに怒っていてもニコツとしなければならない。これは翔子の名案であった。二人はニコニコになれた。実はこの協定はさらに素晴らしかった。私が叱っていたことのうち、「今まで翔子が悪かったことなど一度もなかった」と気が付いた。相手を許し、愛する心・怒になると、人を怒ることなどないのだと解った。

先月の論語塾で「怒」について学びましたね。翔子さんはこの字を何度も何度も書いていくうちに、この文字が心に染み渡り、深い意味が解ったのだといひます。塾生の皆さんも、今一度この「怒」の持つ意味をしっかりと噛み締め、何度も書いて復唱してみましょう。